

片翼だけの天使

生島治郎



集英社

続・片翼だけの天使^{かたよく てんし}

一九八五年五月一〇日 第一刷印刷
一九八五年五月二五日 第一刷発行

定価 九八〇円

著者 生島治郎^{いくしまじろう}

装丁者 山野辺進

発行者 堀内末男

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋二一五―一〇
郵便番号 一〇一

出版部 二三八―二八四二
電話 販売部 二三〇―六一七一

製作課 二三八―二九六四

印刷所 凸版印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁本が万一ございましたら、本社製作課宛にお送りください。送料本社負担でお取り替えいたします。

© 1985 J. IKUSHIMA Printed in Japan

ISBN4-08-775060-4 C0093

目次

片翼戀愛

5

片翼同棲

72

片翼旅行

146

続・片翼だけの天使

片翼恋愛

「こんなことで大丈夫かな？」

と越路は思つて、つくづくと景子の顔を見た。景子はそういう越路をうかがうような表情で見返している。いつもは、陽光が燦々と降り注ぐ野っ原みたいに、アツケラカンと陰ひとつない明るい表情をしているのに、それが今はややしょんぼりしている。

いかにも景子らしくない表情である。

「あんた、オコつてるみたい」

と彼女は思わずおずと言う。

「あたし、マジユかったかね？」

「ふーむ」

と越路はうなつた。

景子が前の亭主岡野の許から飛び出して、越路のところへやってきてから、十日ほどが経つ。越路のところへやってきたと言つても、越路の自宅へ入りこんできたというわけではない。

越路はその自宅で独り住居ぐまいをしているわけで、ここには週に三日、母親が身のまわりの世話をしに通ってくるし、その他、週に二日、姪もアルバイトがわりに資料や本の整理に通ってくる。もちろん、

編集者や来客もある。こういうところへ、いきなり、前の亭主と別れたからと言って、景子をひっぱりこむわけにはいかない。

そこで、当座の間は、越路がよく仕事で利用するホテルに景子を住わせることにした。亭主の許から飛び出してくるとき、景子は身のまわりのものをつめたスーツケースを三つばかりかえてきたきりで、あとはなにも持っていないと言った。現金も十万足らずしか持っていないと言った。

それこそ、身ひとつで飛び出してきたという感じで、きれいさっぱりと過去との縁を切ったことを象徴しているようにも思え、それはそれなりに景子らしく、いっそさわやかだと越路は感じたのだが、あとがいけない。

景子は韓国生れであり、日本語も完全ではなく、日本には身より頼りは一人もない。だから、唯一の身より頼りであった亭主の許から飛び出してきたとなれば、必然的に、越路がその面倒を見ざるを得ない。

もちろん、越路の方も、そんなことは承知の上で、岡野に自分が引きとると立派な口を利いたのだが、実を言うと、女の面倒を見るということがどういうことか、この男わかっていないところがある。越路は前に一度結婚に失敗したことがあり、そのときの結婚生活の経験を除くと、女性と生活を共にしたという経験は皆無である。数日間、女性と一緒にいたとか、一緒に旅行したという経験はあるが、女性の生活の面倒までみたという経験はない。女性と一緒にいる場合、それなりのお小遣い程度の金を渡すことはしょっちゅうだし、そのことについてはかなり場馴れしているつもりではある。

越路は若いときに、ある料亭のおかみさんからこんこんと教えられたことがある。

そのおかみさんが言うには、芸妓遊びをする場合には、常に現金主義に徹しろということであった。

遊んだあとで、必らず現金を渡しておけと言うのである。そうしておかないと、あとでトラブルの元になる。たとえ、それがどんな高価なものであっても、品物よりも現金の方がいい。相手があんたにホれていなかった場合はもちろんのこと、ホれている場合はなおさら現金払いにしておかなくては、あと腐れができてどうしようもなくなるとそのおかみさんはこんこんと諭してくれた。

一緒になって世帯でも持とうと言うのならとにかく、その場ではどんなに相ボレで熱々だったとしても、いずれ男と女は別れることになる。そのときになって、ごたごたしないためには、心を鬼にしても現金を女に渡しておかねばならない。相手がいくらそんなつもりではないと言い張ったり、水くさいと怒ったりしても、押しつけるようにして現金を渡しておく。これが遊びの鉄則であるとおかみさんは強調した。そして、相手の気持ちを傷つけないように、現金を渡せるようになれば、男も一人前だとも……。

「あんたはまだご出世前の身だけれども」

とその七十に近い料亭のおかみは、まだ三十前だった越路に言った。

「いずれ、ご出世なさって、女性とかかわりができるようになったら、くれぐれもそのことにお気をお付けにならなくちゃいけませんよ。立派な男衆が女のために、出世を棒にふったなんて話はあたしやいくらも眼の前で見ているんですからね」

まだもの書きにもならず、一介の編集者で、ある流行作家のお伴でその料亭についてゆき、座敷の隅にかしこまっていた越路は、当時、なるほどそんなものかとおかみの話を聞いていたが、あまり身近な教訓というふうには考えなかった。

安月給のサラリーマンの身としては、高級料亭の客になるなんてことは及びもつかないように思えたし、自分が美妓をはべらせられる身分になれようとは考えもしなかった。流行作家が美人の芸妓と楽しそうに歓談しているのを横眼に見ながら、おかみさんの説教を聞いていなければならぬ自分を情

けないと思いつつもこれが分相応とあきらめていた。

三十を過ぎてから、越路もフリーのものの書きにはなったが果して、流行作家にはほど遠く、高級料亭で芸妓をあげるなんて芸当はできなかった。それでも、ある程度の稼ぎを得られるようになると、生意気に銀座のクラブなどにも出入りするようになる。気に入ったホステスがいれば口説いてみたくもなる。そのときになって、あのおかみのお説教が真実味を帯びてよみがえってきた。おかみは芸妓とのつきあい方を教えてくれたのだろうが、この鉄則はどの水商売の女性にもあてはまりそうだった。

何回か苦い経験を重ねたあげく、越路はきれいな遊びをするためには、結局、おかみの言うことを実行するしかないと身に沁みて感じるようになった。たしかに、おたがいには好意を抱き合っている間ほど、現金を渡すテクニクはむずかしいが、それを怠っているとあとでイヤな思いをする。男女の間の好意は冷めてくるとそれが嫌悪や憎悪に変る場合がしばしばあり、また、一方が冷めていないのに一方が冷めてしまつて、未練がイヤな形になる場合もある。そういうときに、現金で処理しておけば、いくらかおたがいに気が楽になることがしばしばある。

多分、おたがいに現金を仲介にした仲だったのだからと納得しあうからであろう。この場合、現金がおたがいの気持ちにブレーキをかけ、割り切りをよくする役目を果たするのであろう。そう気づいてから、越路はおかみの教訓をできるだけ守るように心がけた。そして、相手を傷つけないように現金を渡すテクニクもなんとか身につけた。

と言つて、金を餌に女性を口説くというわけではない。第一、そんな稼ぎもあるはずがないし、それほどあからさまであつては、女性に対して無礼だという気がする。だから、失礼にならない程度のお小遣いを渡す——いや、渡すというより、受け取っていたかどうかという感じになる。この失礼にならない程度の額という判断がむずかしいし、受け取っていたかどうかという雰囲気にするのはもっとむずかしい。そここのところがうまくできれば、おかみの言う一人前の男になれるのだろうという気が、越路

はしていた。

「おれは銭金ずくで女と遊んだことなんてない」

と公言している男がいると、越路はオヤと思つてしまふ。

オヤ、こいつはあまり遊びつてものを知らないというオヤであり、オヤ、こいつはあまり女の本質を知らないというオヤでもある。そんなに無防備に女とつきあつて大丈夫かしらんと危々かしく思う。男女の仲は両刃の剣であつて、安心しているとグサツとやられる。女は相手によつて仏にもなれるし、鬼にもなれる。男だつてそうなのだが、女ほど変り身がはげしくないように思う。ある意味では、女ほど正直ではない。

男女の仲が純粹にはげしく燃えさかっているときほど、こういう危険をはらんでいる。うっかりふみはずすと奈落の底ということになる。そうなれば美しくて純粹であつたはずのものがうす汚くもなれば邪惡に満ちたものにもなる。

そんなことも知らず、のほほん顔で『銭金ずくで遊んだことはない』などという男を、越路はいい気なもんだなと思う。遊びには裏と表があることを、こいつはまだ知らないんだなと思う。

銭金ずくでなしに女性とつきあおうとすれば、それは結局、おかみが指摘したように、世帯でも持つより仕方がない。

ところで、現在の越路の立場は、その点から見ても、あいまいである。自分が景子を愛していて、景子も自分を愛していることはわかつてゐるが、さて、だからと言って、世帯が持てるかと言うと、これが自信がない。

景子は韓国生れであり、日本語も完全ではないから、日本で暮してゆくには、日本生れの女性のようにスムーズにはいかないだろうと思う。つまり、ごくふつうの結婚生活が成立するというふうには思えない。

そういうハンディを乗り越えて景子と添いとげられるかと訊かれると、越路には自信がない。面倒くさがりやの自分をよく承知しているから、ハンディを乗り越えた愛なんてことを考えただけで、なにかしんどくなってしまう。中年を過ぎた越路には、それに結婚生活にむきは禁物だぐらいのことはわかっていいる。短期間ならむりにでも相手に合わせられるかもしれないが、一生添いとげようというのは無理である。そんなことをしていたら、夫婦生活が自然でなくなり、ギクシャクしてしまう。それにずっと耐えてゆく自信はない。

一度、結婚に失敗したのも、越路がわがままであり、面倒くさがりであったということが大きな原因のひとつであった。若いときでさえそうだったのだから、中年の今になってそんな努力をしろと言われても、考えただけで気が遠くなってしまう。

だから、おたがいにむりなく一緒に暮せるという自信ができるまで、越路は景子に結婚しようとは言うまいと思っていた。

それに、いったんプロポーズをしたら、景子とまた離婚なんてことになりたくはない。離婚はむしろ結婚以上にエネルギーが要るものだということを越路は知っているから、あんなことはもう二度とごめんだと身に沁みているし、景子が相手の場合は、彼女が日本生れではないだけに、いっそう、そういう事態は避けたいと思うってしまう。

それは大げさに言えば、かつて日本が植民地化していた国の人たちを傷つけたくないという気持ちであり、個人的には、身より頼りのない景子を放り出せないという気持ちである。

しかし、一方において、結婚生活は建前だけでは続けられないとも思っている。相手が韓国生れであり、韓国人や中国人に対して、日本人である自分がいくらしろめたいと思っても、そういう贖罪意識だけで結婚生活はつづけられるものではない。そういう結婚生活は偽善でもあるし、逆差別の匂いすらする。第一、男女の仲には、そういう建前は入りこむすきはない。男として、景子がどう

にも必要だと思えないかぎり、結婚生活などできるわけがない。

その他もろもろの事情があつて、越路は今すぐ景子と一緒に暮そうとか、世帯を持とうとかは思っていない。

目下のところは、飛び出してきた景子をどういうふうに引き取つたらいいかということでおろおろしているといった恰好なのである。とにかく、彼女の面倒をみなければいけないが、どう面倒をみればいいのか見当もつかない。

小遣いを渡すテクニクにいくら長^たけていたつて、こういう場合役に立たない。いや、むしろ、小遣いを渡す程度でお茶を濁していて、女性の面倒を全面的にみてやれるような甲斐性もなく、そういう状況に立ち至らないように極力逃げまわつてばかりいたので、いよいよ困惑するばかりである。

こうなると、一丁前の遊び人気取りもだらしがない。『銭金ずくで遊んだことがない』と公言する男を、いい気なものだと軽蔑する資格はないようである。

とりあえず、どこかで部屋を借りるようにと、越路は二百万景子に渡した。それだけあれば部屋を借りた上で、当座の暮しには事欠かないだろうと思つたのである。

ところが、いざホテルを引き払つて、その部屋に引越すという段になると、景子はもうその金がなくなつてしまつたと言う。

どうしてなくなつたのかと訊いてみると、部屋を借り、そこで暮すのに必要な品を買つたらなくなつてしまつたのだと景子はこともなげに答えた。

「とてもいい部屋なんだよ、あんた」

と景子はうれしそうにククツと笑つた。

「目黒なんだけど、あんたのマンションにタクシーだと十分もかからないで行けるつてば。それがスゴク気に入つてね。いつでも、あんたのそばにいられると思うと、ココロがジンとしびれるんだよ。」

とてもうれしいんだってば……」

景子が前の亭主と別れるまでは、彼女はトルコ風呂に勤めていて、二人は店で逢うか、ホテルで逢うかしなければならなかった。どっちの場合も、亭主の眼を盗んだ束の間の情事という感じがつきまとい、うっとうしかった。

「あたしはいつまでもコしていたいんよ」

と景子は言った。店へ出なければならぬ時間がきたとき、家へ帰らねばならない時間がきたとき、道に迷って、ようやく親にめぐりあえた子供がするように、越路の手をぎゅっとにぎりしめながら、景子はいつもこうつぶやくのである。

「コしているのが一時間でも長ければうれしいよ。一分でもいいよ。帰りたくないよ。別れたくないよ」

そういうとき、いつもは明るい表情がくしゃくしゃになり、切なそうになる。

越路の方も、景子を手放したくなかったし、なによりも、亭主の眼を盗んでいるといううっとうしさうしろめたさがやりきれなかったから、こういう関係は一刻も早く清算するか、あるいは、誰はばかりとなく会えるような形にしなければならぬと思いつめるようになった。

景子はアツケラカンとして陽性だから、会っている間は、情事という言葉の持つ重ったるくしめっぽい感じにはならないのだが、いざ別れるというときには、否応なしにその言葉がよみがえってくる。別れたあとで、景子のことを考えるときにも、どうもその言葉がひっかかる。

だから、越路も景子が過去を清算して、自分のところへ飛びこんできたとき、彼女を受け入れる気になった。いきなり、そういう状況になってしまったことにうろたえながらも、これでよかったんだと腹をくくる気になったのである。もうこれで、景子と逢うときにうしろめたい思いをしないですむ。それだけでも、なにか晴れ晴れとした気持ちになった。

もちろん、景子の方はそれだけで有頂天になっているのだから、天下晴れて二人が会えるとなれば、越路の自宅の近くに住居をみつけ、一分でも一秒でも早く、あるいは、一分でも一秒でも長く、二人がいられるようにしたいという気持ちになるのは当然である。越路には景子のそんな気持ちが痛いほどよくわかる。

よくわかりはするが、まだ結婚する気持ちがかたまっていないのに、あまり近間に景子がいるのはまずい気がする。待てしばしの我慢のできない景子のことだから、そんなに近間にいると、自分が会いたいとなれば、こっちの都合も考えずにすつとんできそうである。母親や姪はとにかくとして、来客中にとびこんでくるのはまずい。

そのことも心配だが、都心に近いところに部屋を借りたせいで、二百万の金が一アツという間に消し飛んでしまったのかと思うと、越路は呆然とせざるを得ない。

「部屋ってどんな部屋を借りたんだ？」

越路はおずおずと訊ねてみた。いくら都心に近いとはいえ、権利金敷金を入れて二百万というのは高すぎる。ひよっとすると、どえらいマンションかなにかを借りたのではないかと思つた。

前の亭主の岡野と話し合いをしたとき、岡野が景子について言つた言葉がひとつだけ、越路にはひつかかつていた。

彼女のどういふところが一番大変なんですか？ と越路が岡野に訊いたときのことである。話し合ひの結果、景子は越路が引きとるといふ結論が出たあとであり、彼女と暮した経験のある先輩といった感じで、越路は訊いてみたのだった。

「まず、第一に、あいつはデパートへ行くと、デパート一軒買いかねないようなところがありましてね。欲しいとなると、まるで子供みたいに買ったがるんです」

と岡野は答えた。

「デパート一軒ねえ」

越路は思わず微笑みながら言った。たしかに、景子にはそういうところがある。これが欲しいこれが好きだとなると、なにもかも忘れて夢中になり、一瞬の待てしばしができる。越路についても、そうなったからこそ、なにもかも投げ捨て一目散に彼のふところへ飛びこんできたという感じがある。そのときはいかにも景子らしいと微笑んでいられたが、現実には、そういうくせがしょっちゅう出てくるとなると問題である。何百万もの金をばっばっとつかわれても平然としていられるほど、越路は稼ぎがあるわけではないし、そんなくせをあらためないかぎり、とても景子の面倒を見切れるものではない。

「いいかい、景子。おれはそんなに金持ちじゃないんだからな。そんなにぜいたくな部屋を借りたって、あとで家賃も払えなくなっちゃうぞ」

「ダイジョブだよ。そんなジェイタクな部屋じゃないってば」

と景子は答えた。

「ちっこくてかわいい部屋なんだよ。家賃だって高くないよ。月に十万だよ」

「そうか」

越路は首をひねった。

「だったら、そんなに高くないな。目黒あたりなら安いかもしれないかもしれん」

「でしょうが？」

景子は安心したように笑った。

「あたしはちっこい部屋でいいんだよ。あんたのすぐそばにいただけだってば」

「でも、その程度の部屋なら権利金や敷金を払っても、そんなにしないはずだがね。あとはなにに使ったんだ？」